

巻頭言

デジタルプラクティス編集委員会 委員長 平田 圭二

ビッグデータ、スーパーコンピュータ、インターネットなど目まぐるしくホットトピックが移り変わる中、情報技術と社会との結び付きは近年ますます加速してきました。そんな世界において生活やビジネスを支えているのは最先端技術だけではありません。やればできると分かっているにもかかわらず実際にやってみるとさまざまな問題が生じるもので、現場で情報技術を使いこなす「技術」も重要な役割を果たしていることは技術者ならどなたでも同意していただけたと思います。むしろ、そのような「技術」なくして情報技術が社会と結び付くことはあり得ないと言っても過言ではありません。我々はこの「技術」をプラクティスと呼んでいます。

本会がプラクティスに注目しデジタルプラクティス（DP）を創刊した原点はそこにありました。DPが2010年2月に創刊され3年半が経過しますが、防災や減災、セキュリティやプライバシーの問題、大規模なミッションクリティカルシステムの構築や運用などを通して、プラクティスの意義や価値がますます認識されるようになってきたと感じます。ベストプラクティスを追求することは我々技術者に課せられた重要な使命の1つであり、そのような使命を全うすることが、各情報技術者のひいては情報技術者全体の社会的地位向上に結び付くのだと思っています。

DPは論文誌です。これまでDPを編集・発行してきて、プラクティスを社会全体で共有するときも論文という形式が有効であることが確認できたと思います。どうぞ情報技術者である皆様にはプラクティス論文の著者となって、技術者としてのレベルアップ、ご自身のキャリア開発にお役立てください。ただし論文と言っても、これからの時代に合った論文のあり方を模索しなければならないと考えています（紺屋の白袴と言われぬように）。また、DPは招待論文が記事として面白いので招待論文だけに絞った方がいいという意見も時折いただきます。招待論文を評価して下さるのは大変嬉しいのですが、基本的に招待論文はプラクティス論文のお手本と位置付けて掲載しています。

DPは皆様から投稿されるプラクティス論文によって成り立っています。しかし残念ながら、現在の投稿論文数はそれほど多くありません。それは、現場で日々ITを実践されている技術者の方々にとって論文を書いて得られるメリットが十分に理解されていない、技術者の方々が多忙で論文を書く余裕がない、会社や職場がとても論文を書く雰囲気ではないなどがその理由ではないかと分析しています。まだ効果は現れていませんが、全国大会にてイベントを企画し周知に努めたり、非会員の方々にもDPを知っていただけるようJISA主催シンポジウムやJISAアワードとの連携も試みています。さらにDPをAmazonでも購入できるようにいたしました。皆様からの論文投稿をお待ちしております。

末筆になりましたが、著者、査読者、読者の皆様はこの場を借りて厚く御礼申し上げます。